

カナダ先住民サーニッチが居留地で看取ること —地域の看取りとしてのカナダ先住民居留地—

渥美一弥（自治医科大学）

カナダの主流社会による先住民の死に関するイメージは都会の片隅の路上で行き倒れとなって亡くなっている姿であろう。確かに数年前までインターネットでFirst Nations, death, palliative care等の単語を入力して検索すると、そのような内容の記事が数多く見られた

しかし、都市に住む先住民とは異なり、居留地における死に関しては、上記のイメージとはまったく別の光景を目にする。生前多くの人に迷惑をかけた人物でさえも、ファミリー（しばしばリネージとほぼ同じ意味で使われる）に囲まれ、穏やかに静かに亡くなって行き、その葬儀には居留地の殆どが参加する。

実際にサーニッチの居留地において、人々はインディアン名を受ける命名儀礼と葬送儀礼に最も高い関心を払っている。彼らは命名儀礼のために貯金をして、少しでも盛大なボトラッチを開こうとするし、葬儀のために金を貯め、ファミリー全員が参加し、大宴会を開き、その進行中に金属製の大きなボウルが回って来て、参加した人々はそれに紙幣を入れていく。集まったお金を葬儀のために墓穴掘りや埋葬行事、料理などを行なった人々に分配される。

そんな死の儀礼に関して発表者は長年心に温めてきた一つの情景がある。それはサーニッチの文化について最も多くの話を聞かせてくれた長老Eが語ってくれたものである。「ある男が妻を亡くし、友人や親族を呼んでボトラッチを開いた。豪華な食事の後、男は彫刻家に作ってもらったばかりの長さ五メートルほどのカヌーを披露した。そのカヌーには（サーニッチの人々にとっては馴染深い）ワタリガラスやカエルなどが彫っており、美しいペイントが施されていた。彼は、招かれた者たちにそのカヌーの中を見せた。その中には、船底から20センチくらいの厚さで一面に25セント硬貨が詰まっていた。そして、男は妻を亡くした悲しみを表現するために、硬貨がいっぱい詰まったその真新しいカヌーを人々の目の前で海に沈めた」。この話を聞いていたサーニッチの人々は口々に「いい話だ」と言っていた。「感動した」と言って涙ぐむ者もいた。だが、1991年当時まだサーニッチの調査を始めたばかりだった発表者は彼らの涙の意味が分からなかった。

サーニッチでは年老いて病になると家族以外面会できないことが多い。それは死に行く本人の意志による。殆どのサーニッチは死の瞬間まで家族と共に過ごす。それはきわめて静かな時間なのである。

キーワード カナダ先住民 死 看取り

死に行く人は家族またはファミリーが当番制で食事を与えたり身の回りの世話をしたり様々なケアをする。カナダでは、2002年11月に公表された『ロマノウ委員会報告』（Building on Values: The Future of Health Care in Canada）において、在宅ケアは「今後の最重要サービス」として位置づけられた（Romanow 2002: 171）ので、先住民の死期を迎えつつある人にも公認の介護師が定期的にやって来て世話をする。このケアを受け入れる先住民家族もあれば、家族だけで世話をする場合もある。

発表者の恩人である長老Eは2011年の死の瞬間まで家族だけのケアを選択し、他の者はだれも彼に会うことが出来なかった。人々はEの選択を尊重し、決して彼の家を訪問する者はいなかった。発表者は居留地近くの先住民が集まる食堂でEの病状を聞かされた。長年指導を仰いだ長老に会えるように友人たちに頼んだのだが、それはサーニッチの人々からすれば無理な要求だったようだ。発表者はサーニッチのルールを無視していたといえる。多くのサーニッチが食事をしていた食堂で、二度と長老に会えないことを確認した発表者は子どものように大声で泣いた。

あくる年のカナダ訪問時、長老が家族に囲まれ穏やかに亡くなったことを聞かされた。長老の家族から長い間の友情と長老に対する尊敬の意を表したことに感謝の言葉があった。家族だけで過ごした最後の時間は長老にとって、とても幸せな時間だったのだと多くのサーニッチの友人たちが言った。長老Eは生前もとても幸せな人生だと発表者には思えるが、サーニッチはどんなに生きている間に不幸であっても、死の瞬間が幸福ならば「あの世」で幸せに暮せると言う。その死の理想に向かって生きているように部外者には見える。穏やかで静かな死へ向かって、I heard owl called my name.（フクロウが私の名前を呼んだ）、つまり、その人に死期が近づいたとされた瞬間から、周囲の者は、その人のよりよい死に向けて最大限の努力をするという。それが、サーニッチが居留地において看取ることなのである。